Ethiopia の人と風物

蔵 田 延 男*

Man and Nature in Ethiopia

By

Nobuo KURATA

Abstract

Ringed by the militant Islam, Christian Ethiopia isolated herself from the outside world for last ten centuries. Now His Majesty Haile Selassie I leads his ancient land and people to modernity. The pace is slow but steady.

The government of this country is nominally constitutional monarchy; in fact, a benevolent autocracy. The area of this country is about 1,184,000 square kilometers, and the accurate survey is now in progress. In the country 22,000,000 dusk-skinned, mostly non-Negroid peoples populate, but has never had a national census. Their languages officially Amharic, plus English, Italian and some others. Their religion is Ethiopian Orthodox Christian, with many Moslems and pagans.

The capital is Addis Ababa or Addis Abeba. Climate is equatorially hot in the lowlands, but temperate on the highlands.

An ever-growing flood of travelers is discovering Ethiopia, home of primitive peoples and unparalleled wild game only short air hops from modern hotels.

Generally speaking, this African empire is the country of future.

ま え が き

66年10月から11月にかけて、社団法人国際建設技術協会の仲立ちで、私たち水井戸に関係のある人間5人が African Empire の異名をもつ Ethiopia を訪れる機会をもつた。

調査の結果それ自体については、資金もとの通産省当局への正式報告書にゆずるとして、ここに旅行中取材した国内事情の断片を、撮影してきた写真を中心に紹介しあげたいと思う。わが国とたいへんよく似ている面があり、しかも以前から何かと関連のある国のわりに、詳しいことがほとんど知らされていない実情から考えると、少々多すぎるかもしれないが、何かの参考になりはせぬかという風にも考えられる。

By W. Kindred

ところで私たちの調査や観察は、必ずしも奥地といったところではなかつたし、なにぶん3,000年の歴史の上に立つ誇り高いお国柄、国の恥部と思われるような所を写真にとられることを、激しく拒絶しているので、いきおい日本式にいつて、銀座通りの、しかもその片側をぶらついて

* 地質調査所応用地質部長

きたという程度であつたということにはなろう。

ともあれ、未来ある国、the country of future と自称する Ethiopia の近情の一端は示されていよう。使用した写真のうち2~3は、他の機会に使用したものが全体構成の都合上、まじっていることを念のため申し添えておきたい。

I. 国土とそのなりたち

Ethiopia は Africa 大陸の北東部、いわゆる Horn of Africa のなかに座を占める内陸国であつたが、北部の Eritrea を併合して以来、国境線延長およそ 6,000 km のうちの 800 km ほどが海岸線となり、紅海に面するようになっていいる。現在その国土の総面積 1,184,000 km²、わが国の 3.2 倍に当たっており、西側に Sudan、南側に Kenya および Somalia、東側にフランス領ならびにイギリス領の Somaliland がある。

第1図 エチオピア帝国の概要

国土の北端、紅海海岸が北緯 17 度 30 分、東経 38 度、西端 Sudan との国境が北緯 7 度 30 分、東経 33 度、南端は Kenya との国境で北緯 3 度 15 分、東経 38 度、さらに東端は Somalia およびイギリス領 Somaliland との三国国境で、北緯 8 度、東経 48 度、このなかにややいびつな菱形をして存在しているのが、3,000 年の歴史をほこる Ethiopia 帝国にほかならない。

国土の 15 % ほどは、やや低い、もしくは海岸に沿う低地で、それには主として Kenya、Sudan との三国国境付近から北東に伸び、ほぼ Ethiopia を東西に二分する Ethiopia Main Rift が、紅海に近づいてつくる Awash 河の流域平野と、紅海沿海低地の一部とが含まれる。85 % は高原もしくは山岳であつて、その半分、国土全体の約 40 % は 1,500m 以上の高さの高原、いわゆる Abyssinia 高原となつていいる。そしてその大部分がいわゆる Trap

Series、つまり中生代後半から第四紀にかけて、断続的に、かつ洪水状に噴出した熔岩ないし火山成の岩石に厚くおおわれている。

高原のうち Main Rift の西側～北西側に当たる部分は通称中部高原と呼ばれているが、ほぼ 2,000 m 級の標高の高原が西に傾いて、所々に火山が噴出し、山塊・山脈をつくつて、Sudan との国境の方に向かって下がつており、ここに Nile 水系に属する Blue Nile をはじめ、大河川が北西に向かう谷をうがつていいる。Blue Nile の水源である Tana 湖は海拔 1,830 m、水面積およそ 2,500 km² を占め、水深は最大十数 m で浅いか、これから排出される水量は、かの Nile の主水源にふさわしく、それを受けて流れる Blue Nile は洪水時に White Nile の 9 倍に達する水量を運ぶという。

Main Rift の東～南東側には、その西縁に 2,000 m 級の高原があり、これから南東に向かつて高度が下がり、砂漠的景観を保ちつつ、Somalia 共和国につながつていいる。Shibeli, Juba などの水系もほぼこの勾

第2図 Ethiopia を含む Horn of Africa の地形 (P. A. Mohr :
Geography of Ethiopia による)

配に沿って南東に排水している。

Main Rift はおおむね 1,500 m 以下の高度で、その南西部では Chamo, Margherita, Shala, Zwai などの湖水が列状にならび、中部で Awash 河を入れてからは Awash 溪谷をつくり、下がって北東方向に開く巨大なデルタをこしらえ、紅海の方に向かっていているが、実際には水は Abbe 湖という湖水中に吸い込まれ、Afar Alps と呼ぶ小山脈によつて、紅海とは水理的に絶縁されている。

Eritrea の海岸近くには、Danakil 砂漠があり、地球上もつとも高温な土地の一つとして、140°F という高温の記録を示している。

そしてこの Danakil 砂漠の一角に Dullol 陥没帯と称せられる海面下のおう地があり、そこは紅海と地質的に密接に関連していて、イオウ・食塩・カリその他の塩類鉱物を大量に含んでいるという。

国土のなかの最高点は中部高原 Tana 湖の北東 140 km のところにそびえる Mts. Simiens であり、その主峯 Ras Dashan の海拔標高 4,620 m である。なお東部高原ではその西端にそびえる Mt. Bale あるいは別名 Mt. Batu の 4,300 m が最も高い。

II. 気候、主として雨について

Ethiopia はその国土の地勢からして、熱帯の十分な湿度が雨となつて降り注ぎ、国土の 35 % に当たる南西部および中央部に年間 1,000 mm 以上の雨をもたらしている。雨量の最大は国の西端に近い Boro 河

第3図 Ethiopia の年平均降水量 (Ato Kebede Tato: Rainfall in Ethiopia, *Ethio. Geogr. Jour.*, Vol. 2, No. 2 による)

の水源地帯で2,400 mm をこえている。むろんこの反面、紅海に面する Eritrea や Somalia に接する Harar, Bale などの地区では500 mm 以下という寡雨地帯もかなりにひろい。試算によると、こうして1年間に Ethiopia 全土に降り注ぐ雨の総量は約1兆 m^3 に近く、 $\frac{1}{3}$ の面積のわが国のそれにくらべると50%かた多い量になる。

気温は俗に *Kolla* と称する2,000 m 以下の熱帯地域で高く、その一部に上に述べた Dallol 低地なども含まれる。これに対して、2,000 m 以上の高さをもっている、いわゆる Abyssinia 高原の上では、気候は概して温和であり、いわゆる準熱帯地域 *Woina Dega* と呼ばれるところに当たる。ここでは年間を通じてほぼ $18^{\circ}C$ ($72^{\circ}F$) 前後の気温と、それに加えて1,000 mm 前後の雨量とに支えられて、自然状態で森林であるが、これを開拓し、コーヒー・綿花・とうもろこし・てふ・きびなどの耕作を行ない、それらの畑がすみずみまでひろがっている。むろん都市もここに栄え、2,200 万の Ethiopia 国民の主要部が住みついているところでもある。

Ethiopia の気象については、政府機関の Civil Aviation Administration に属する Meteorological Serv-

第4図 Ethiopia の地方行政区画
Eritrea の併合で合計 14 の Provinces になっている。

ice が国内 150 カ所で観測を行なっており、すでになかには 10 年以上の記録をえているところもある。Ato Kebede Tato によると、Ethiopia の国内各地の気象条件は、主として上空を支配する気流が、乾季に当たる 10 月から翌年の 5 月にかけては、北東から南西に向かつて、Arabia 半島から吹き込む温暖な乾燥気流に支配され、6 月末から 9 月なかばまでの雨季には、北方からの乾燥気流が後退し、南西方 Victoria 湖方面から北東に吹きあげる温暖な湿風に見舞われるうえ、南部の地方ではさらに南東からの湿風も加わるので、これらの湿風が 2,000 m 級の高原、3,000 m 級の山岳にぶつかると、大量の雨を降らせるのだという。

したがって国土の南部から南西部では、Main Rift の谷をはさんで、年間 1,000 mm 以上の降雨を記録する地区があり、2,400 mm 以上にも達する部分も存在するというわけであろう。

全体として目だつた気象災害はない。ただし 8 月・9 月、とくに 9 月に入ると、しばしば雷害を伴うという。Addis Ababa 付近では、市街地の西にわだかまる Mts. Wochecha (最高点海拔 3,380 m) からわき出る雷雲が相当の雷害を与えるという。

私たちのいたところにも遠雷を聞いたが、とにかく雨が降りだすと目だつて気温が下がるのに気がつく。6~8 月の雨季のころ、むしろ低温になって、部室のなかで毛布 2 枚をかけて過ごすということが、冬ならぬ夏のさだなかに経験されるというのも、私たちからみると異様に感じられるが、それがやはり Ethiopia の自然環境のいつわらぬ姿と思われる。

写真 1 高原表面の耕作景

いちばん厚いところでは2,000 m 以上になるといふ Trap Series に厚くおおわれている Ethiopia の高原の表面は、全体としてゆるい起伏を伴っているが、たいてい玄武岩の風化した黒い土を厚くかぶっており、すみずみまで耕されているといった感じである。きび・とうもろこし・麦、そして主食になるてふが畑につくられている。むろん場所によるとコーヒー・綿花・さとうきびが栽培される。

写真 2 Pre Cam. の侵蝕景

国の西端に近い Lembli Dolo などにもいつた。日本人では正式にはじめて訪れたところである。Jimma からの機上からみると、さまざまな地形がのぞまれるが、これはその一つ、Pre Cam. の花崗岩の侵蝕景と思われる。付近は多雨地域に属している。

写真 3 Addis Ababa 南郊

むこうに3,000 m の Entoto 山が見え、その下に Addis Ababa がひろがっている。南東に向かう鉄道と National Road (Akaki Road) が平行してはしり、その沿線には耕地にかこまれて、点々と工場がのぞまれる。

写真 4 切り石にさかんに使われている Trachyte

Trap Series のメンバーとしてあちこちに露出するが、Addis の裏山がこれでできている。風化すると多彩な表面を示すので、カラーでとるとまことに美しい岩石である。

写真 5 Haile Selassie I 世橋

Blue Nile にかけられたみごとな橋, Abyssinia 高原の断面千数百 m が両側の断崖にみられるし, 地学者にはたのしい小旅行地である。もつとも, Ethiopia の観光地としては三重丸ぐらいの重要なところらしい。

写真 6 Meteorological Service の主任技師

全土にわたって約 150 の気象観測点がある。Addis の本庁は海拔 2,408 m の Trachyandesite の丘陵上にある。気圧が 760 ミリバール台, 各種の雨量計を用いて研究していたのが印象につよく残った。

写真 7 Addis Ababa の City Hall

つまり市役所のざん新な建築様式。Ethiopia にいだいていつた期待はこれでかなり大幅に変更させられるだろう。海拔 2,500 m, 市内のたいていどこからでも望まれる位置にある。

写真 8 Ethiopia Commercial Bank

Addis Ababa の目抜きの大通り, Haile Selassie I 世広場のわきに印象に残るスタイルで座を占めている。球が金色で朝日・夕日にはえてことのほか美しい。

写真 9 Victory Monument

Addis Ababa の Yekatit 12 Square にある。対伊戦争の戦勝記念碑である。

写真 10 Judah のライオン

うしろ向きで恐縮であるが、Haile Selassie I 世広場をかざるこのライオン像こそこの国の象徴であろう。右側大通りのいきつく正面に City Hall, うら山は 3,000 m の Entoto 山, 左に Comm. Bank が見える。この三つを入れるにはライオン像にうしろ向きになつてもらわざるをえない。

写真 11 バス 停

Addis には約 2 万台の自動車があるという。朝夕のラッシュは一刻なかなかたいへんなものである。イタリー製の赤いバスが思つたより清潔な感じで、ひんぱんにはしつている。農家がトタン板にかわつているのと同様、バス停などもトタン製である。

写真 12 Railway Station of Addis Ababa

フランス領 Somaliland の Djibout (ジブチ) から 700 km, 0 m から 2,400 m までのぼつてくる Diesel Train の終点 Addis Ababa Station の入口のスナップ。

写真 13 Africa Hall

Addis Ababa の東部の新開地に超デラックスにつくられた最優秀建物である。OAU の会議場であるが、そのロビーなどは Africa のイメージをこなごなに砕いてしまう。宗教的味わい深いステンドグラスの美しさには、一入感銘が深まる。

写真 14 高層ビルの建築現場

軟弱地盤に金のかかるところと違って硬い火山岩の上につくれるし、耐震構造の必要もないので、14～15階のビルが手やすくつくられている。それでも私営のアパート・マンションは、公共施設より根切りを深くして安全をみる習慣になつていているという。イタリー系の土建会社と思われる工事現場では朝から人だかりがして、土木機械の見物をたのしんでいる。

写真 15 好感のもてる国道

Ethiopia では Highway Authority が、National Road, いわゆる全天候道路の建設におおいに努力している。National Road の全長 65,000 miles, たいていの都市はアスファルト舗装の National Road にのつて行ける。Addis からは五つの方向に National Road が派出している。修理が行き届いているし、よごれものが散乱していることはほとんどなく、走る自動車に対する住民のモラルは案外にしっかりしている。

写真 16 たつた一軒の魚屋

Haile Selassie I 世大学で気候学を研究している鈴木秀夫君の奥さんの案内で Addis でたつた1軒の魚屋に行つた。もつとも週に2回十数種類入荷するだけなので、営業上ほかの肉類も売っているが……。紅海・アデン湾からの魚族さまの到着日には、3軒ある中華料理屋がごそつと仕入れにくるので、日本人の奥さん連中は猫のように目ざす魚を奪つてこなければならないという。ちなみに Ethiopian はまだ、米と魚には縁遠いのである。

写真 17 皇帝の写真

これは Alexan というかの国での有力な実業家のポートレートであるが、この写真の目的は Ethiopia はどこへいつても使用中の部室には皇帝の写真か肖像画が掲げられているということを示すことにある。その写真や肖像画には、一定の型式はないが、すべての国民が皇帝を信頼し、皇帝がいるから、やってくださるから自分たちは生活できるのだと心から思っていることはほぼまちがいなさそうである。

写真 18 日本製自転車

日本の製品はいたって少ない。38万 km² にはほんらんしている自動車もかの地にはまだ1台もない。少しばかりのカメラと自転車が気がつくくらいである。わが日本製の自転車ふじ号を“オマーの国のだぞ。おれは日本ののにつてるんだ。おれに仕事を世話してくれんか”と前半しおらしく、後半やや哀願的にせまってきた27歳のとある青年。

写真 19 子供たち

大人を含めて Ethiopia では写真をとろうとすると、さつと逃げる“人種”と、積極的にファインダーのなかにとび込んでくる“人種”とふたとおりある。むしろここに写っているのは後者の“人種”たちである。

写真 20 金銀細工商

Addis でも Asmara でも金の十字架や指輪・くびかざりなどを売る店が並んでいる。銀製品の専門店もある。細工はへただが、日本で金など買ったことのない私たちには1グラム5エチドル(720円)で買えることに異常な興味をおぼえるのである。

写真 21 ガラ族の既婚婦人

井戸を掘ることにたけているというガラ族はかなり広くひろがつて生活しているようであるが、これは Dire Dawa 付近での取材。髪形が既婚婦人のしるしであるというが、念のため彼女の背中におぶっている赤ん坊に御目をとめられたい。

写真 22 道を行く牧夫たち

彼らは牛を追ひ、羊群をまとめて転々と移動している。花のにおいがちつともしないのがふしぎであったが、とにかく彼らに近づいてもいやらしいにおいは少しも感じられないし、Abebe Bikila 選手でないが、みんながつちりした、しかも細身のりつばなからだの持主である。

写真 22 雲の美しい高原にのびる
National Road

(Addis から南西にのびる Jimma Road にて)

写真 24 雲のかけをやどす教会

コプト派のクリスチアンの多い Ethiopia ではいたるところに目をみはるような教会がある。これは Addis から北へ向かつて 120 km, Blue Nile へ行く途中の Debre Libanos というところの有名な古い教会のひるさがりのスナップ。

写真 25 Lembi Dole の井戸

玄武岩の上の厚い風化土のなかにもぐり込んだ地下水を 20 m 前後の素掘り井戸でくみあげている。西の国境に近い Lembi Dole では人口 4,500, こうした井戸総数 700 眼を数えるという。

写真 26 路上の農夫

日本が高級な農耕器具をもちこんでも Ethiopia では買手がない。彼らはいま長年使っていた木のくわに、少しばかり鋼をつけることによつて、深く耕すことができる。……そのことにせいじつばいで、それ以上のことは経済的にも感覚的にもまだ必要でない。運搬式のスプリングラーより鳥取砂丘あたりでやつている水桶の底を抜いて撒水するあのやり方でかながいすることに関心をもっている。

写真 27 H. S. I 大学

Haile Selassie I 世の名のついたところは Ethiopia にすこぶる多い。国立最高の大学もまた当然その名を冠している。学生 3,000 人, 90 % 以上が Ethiopian。彼らはみな非常に熱心に勉強しているという。理学部地質学科には学生 20 名ならず, 文学部地理学科には学生 50 名ほどがいるという。

写真 28 高原の上の学校

Haile Selassie I 世皇帝はまめに国内を歩き回られ、学校・病院・水道・道路のことなどを指示されるという。とくに教育は急速に進められているらしい。あちこちにいく組みもサッカーのできそうなグラウンドつきで学校が建てられているのが目につく。この写真は Addis から Tana 湖への道、玄武岩質熔岩のもつとも厚い Gojam Prov. の Dejen の小学校のシュレット。

写真 29 Greek の学校

Ethiopia でギリシャ人が、腰をすえて仕事をしているのが注目に値する。コーヒー園などの経営に多くに目だつた手腕を発揮している。彼らは僻地に彼らだけの学校をつくり、教室に陽気な空気をみなぎらせていた。

写真 30 教会の遊び場

しばしば教会が子供の遊び場を提供している。もつとも子供たちの遊び道具はボールをけり合うサッカーまがいの遊戯と、いま一つ古い自転車などの車輪を棒で押してころがすことぐらいしかないらしい。このへんに民度の低さと、購売欲をいかにしてださせていくかを解きほぐす一つの鍵があるかもしれない。

写真 31 セメント工場

正確には Imperial Cement Corporation というが、月産7万トンの工場が三つ、4万トンののが一つある。Addis 南部には7万トンのがあつて、一部で石綿パイプもつくりだしている。電気集塵器や構内の照明などなかなかどうして一流の規模である。

写真 32 未来ある国

たしかに Ethiopia は進んだところもありはするが平均するとずつと民度は低い（個人所得がアラブ連合のなおよ $\frac{1}{8}$ だという）、貧しさがあふれている。しかし街頭でみかける Ethiopian はみんな胸をはり活発に歩いている。バーこそ多いが、酒乱はみかけないし、喫煙の風習があまりないので、街頭に吸いがらの落ちているのも見ない。彼ら自身が言っている“未来ある国”は案外そのとおりかもしれない。

III. 首都 Addis Ababa 所見

この国の首都 Addis Ababa あるいは Addis Abeba は、新しい花という意味のことばであつて、その市街地は中部高原の東縁に沿う、3,000 m 級の分水嶺が北緯 9 度付近に至つて南西にまがり込んだ、その南側のすそに当たつてひろがつている。すそとはいつても、海拔 2,300 m から 2,600 m あまりの高さのところ、およそ 100 km² にわたつてひろがつているのだから、遠望するとどうしてなかなか都市景観をみせている。背後の 3,000 m 級の山は Mts. Entoto といわれる Trachyte を厚くかぶつた連山で、頂上近く最古の教会があり、その近くにまで耕地がある。朝、日の出の直後ぐらいにのぼつていくと Abebe Bikila 2 世よろしく、青年たちがマラソンのトレーニングに余念がない。気圧が 720~730 ミリバール、なるほどこれではきたえられるわけだと痛感したひとこまもあつた。

Addis Ababa の市街地そのものは、比高差のおおきな南北方向 2 本の大通りと、その大通りの節のようになつてゐる数カ所の広場、つまりロータリー、そしてそれらの広場から市街地の外に伸びていく五つの National Road、空港あるいは Entoto 山頂などに向かう行きどまりの数本の道路とが、やや複雑なかつこうで組み合わさつてできている。海拔 2,500 m 前後の玄武岩上にある City Hall、つまり市役所の建物は、西側の目抜きの大通りのま正面にあつて、あつ、これが Ethiopia と驚くほどのあかぬけした威容をみせている。しかも空港から市内に入ると、南の方の市街地からは、どこからでも望めるような位置につくられているのに気がつく。

Haile Selassie I 世皇帝の皇居、同名の大学、Africa Hall などは、東側の目抜きの大通りに面している。

市街地は、一部泥岩層をはさむ Trap Series の Trachyandesite、あるいは玄武岩の上にあり、東西方向の断層に沿つて温泉がわき出している。東西両大通りのほぼ中間でわき出しているのが Hilwoha 温泉場となつてゐるが、この温泉の開発初期には、わが近藤忠三会員が数カ月にわたつて調査活躍し、その結果得られた Addis 市内の地質構造は、P. A. Mohr 教授の労作 “The Geology of Ethiopia” (全 268 ページ) のなかに紹介され、高く評価されている。

Addis Ababa の市内には、アカシアの森林、刈り込んだもちの木のような並木、それに杉か檜かともどような樹木がよく茂つていて、りつばな森のまちであり、カンナ・ブーゲンビル・マスカルフラワー・マルバエアなど、Ethiopian にいわせるとどれもこれも Ababa、つまり “花” であるが、そうした花々が美しく咲き乱れていた。もつとも 10 月は雨季明けでいちばん青々しているとかで、11 月にもなるとやはり青枯れしてくる気配が見えだしていた。

市内には温泉にまじつて使える地下水そのものもであるが、市の上水道は西の郊外にある Gafarsa というところにある貯水池の水を浄水して、日量 20,000 m³ あまり送水して来ている。ホテル・オフィス・マンション・学校などのほかは共用栓が多く、水がめを背負つた婦人たちが 1 m³ 50 cents (邦貨約 70 円相当) の水を求めて、水栓のまわりに群がつている風景が至る所にみられるのであつた。

人口 45 万余、仕事を求める若者はあちこちで私たちを外人とみて、たもとを引くのであるが、男女の姿態ともに細身で背が高く、といつて日本人がコンプレックスを感じるほどでなく、むしろ親近感を感じるにそれほど時間を要しない。

もともとこの国の人種構成は 70 種におよぶとかで、かなり複雑のようであるが、大別すると、アラビア系の人種と混血しているハム族 (a) と、そうした影響をあまり受けていないハム族 (b) および辺境に住むネグロ族 (c) の、都合三つになる。(a) に含まれ、ことばとしてアムハラ語を用いるアムハラ族とチグリニア語を用いるチグレ族とが支配民族で、Ethiopian としての国民意識を強くもっている。井戸を掘る技術にたけているというガラ族などは (b) に属する。

ところで、この国にはまだ戸籍なるものがない。姓がたいてい同じで、名をもつて呼び合う。したがつて Dr. Taro Yamada は Hotel などではいつの間にか Dr. Taro でないと通じなくなつてしまう。郵便は

P. O. Box がないと受けとれない。縁故をたよって数十人が1人の P. O. Box 所有者を利用する例があるという。正式には 45 Ethiopia Dollars の mail stamp を知らずに 30 E. D. だけはつて出した葉書が何の障害もなしに日本に着いていたし、調査国としても電報より封書の方が早いことを経験した。

自動車をはじめイタリー製・ドイツ製の商品が多いのが目だが、Addis の市内は急坂が多いので、日本の車では気圧の低いこと (760 ミリパール台) も手伝って息切れしてしまうだろう。

胸を張って誇り高く歩いている Ethiopian にして数字にはいたって弱い。一般には 3, 3, 3 で 9 まで数えるのがせいじつばいだというが、たしかに Hotel の金勘定などはおおごとになる場合が少なくなかった。おおぜいの国民がコプト派のクリスチャンである。したがって教会は随所にあり、1950 年以降は Ethiopian 自身で大司教になれるという協定がエジプトとの間にでき、Ethiopia 教会が誕生した。アムハラ族・チグレ族・一部のガラ族がこれを国教としている。

IV. 皇帝のもとに

Ethiopia でもつとも数多く、どこでもみせつけられるものは、いうまでもなく、皇帝 Haile Selassie I 世の写真あるいは肖像画である。ときには皇后の遺影もあるが、総じてとくに一定の形式がなく、いろいろの向き・服装・大きさのものが好みのままに、居室・事務室・応接室・バー・レストランなど、ありとあらゆる空間の中央と思われるところに掲げてある。掲げてないのを探すことは困難であろう。なかにはゴブラン織の 2 m 四方の豪華な皇帝像が掲げられていることもあった。

とにかくこのような状況の裏面には皇帝が 75 歳の高齢にありながら、国内をまめに巡遊し、すべての国情に通じ、Ministry of Pen(わが国だと宮内省といったところか)を通じて国民の希望を少しずつかなえている。したがって国民も皇帝が約束してくれたから信じているといったぐあいで気長にまつている。つまり相互信頼の政治がみごとに行なわれているものと感ぜざるをえない。

国土の地図づくりと、道路の建設はとくに関心が払われているが、水道や放牧中の牛・羊を定着させるための牧畜用水、それに学校・病院などの建設に伴ってそれらの水源確保に最近異常な熱意が払われだしており、Blue Nile の水文調査や貯水池の建設にも力が入りかけている。

F. Dixey 博士の進言があつたにもかかわらず、地質調査機関はまだできていない。Ministry of Mines に若干の専門家がいる程度で、予想される多種類・大規模な地下資源の開発は、輸送がたいへんという大きな壁もさることながら、真実まだ組織的に調査もされていない。さしあたって必要な地下水も、調査らしい調査は皆無であるから逆にいえばはなはだやりがいのある余地が大幅にあるということにもなる。

民度は低くふつう工場従業者で一家 1.5 Ethio. Dollars (216 円) ならおんの字だというくらいだし、国家予算 35,000 万 Ethio. Dollars の数%を教育につぎ込んでいるほか、米・ソ・ユーゴなどの借款がかなりものをいつてはいるが、国土は広く、国民の生活空間は 37 万 km² のわが国で想像するには困難なほどの、広さ・豊かさをもっている。

The Geology of Ethiopia の著者 P. A. Mohr 氏は母国カナダから遠来して、4 年がかりで精力的にこの国の地質の概要を描きだしている。公共事業省水資源庁の当面の責任者 Dawit 部長によると、この地質図も “better than guess” にすぎないそうだが、地学関係の技術省が身を投ずれば歓迎されることは請け合える国である。